

## みんながリスクマネジャー



田中雅彦 [たなかまさひこ]  
介護老人保健施設寿苑(福岡県)  
リハビリテーション課 主任

## はじめに

2021年度の介護報酬改定では「安全対策担当者の配置」が明記されました。そこでリスクマネジャーの必要性がうたわれ、活発に活動していくことが求められました。

全老健は、以前からリスクマネジャーの育成に取り組んでいます。私が「介護老人保健施設リスクマネジャー」の資格を取得したのは、2013年9月。その講習で得た知識をもとに、施設にリスク対応を広めています。

今回、入職してからこれまでのリスクへの取り組みを振り返って、私がどのように職員に伝え、施設がどう変わっていったのかをお話します。

## 施設紹介

当苑は、福岡県南部のみやま市にあります。市には矢部川などの一級河川が流れていて、なすやセロリ、高菜といった野菜のハウス栽培が盛んで、農業のまちとして発展してきました。高齢化率は、2025年の予測では42.1%、2045年の予測は48.0%。

当苑の開設は、1989年7月。これからの高齢社会に対応するため、リハビリの必要性を感じ、40床で始めました。1993年3月には認知症専門棟36床を増床し、計76床になりました。通所リハビリは、きめ細かなサービスを徹底するため定員10名。2012年4月には、市内の主要道路である国道209号線沿いへ全面移転をしました。2018年8月には、地域のニーズに応じて訪問リハビリを開設しました。

施設理念として、「個人の尊厳を重視したケアに取り組み、地域にねざした老健、地域福祉に貢献できる施設をめざします」を掲げ、現在、超強化型として運営しています。

## 業務について

私は、認知症専門棟の作業療法士として、リハビリ

を担当しています。

そこで大切にしていることは、「笑いのあるリハビリ」「できる体験から、自信をもって生活できるようにする」「認知症があっても、在宅生活を諦めない」の3点です。

なかなか活動する気分にならない利用者には、調理、木工、スポーツなど、これまでの生活のなかで興味をもったものを利用して、楽しんで活動してもらっています。

ご飯を食べることが難しい利用者には、その方の好物を栄養課に準備してもらうこともあります。食物を手にしたとき、箸やスプーンの動かし方はどうか、皿の深さは適切かを見ながら、支援しています。

トイレでの排泄が難しい方には、立位が可能な短時間内に、便器への乗り移りだけや下衣の下げだけ、上げだけの動きを行ってもらいます。

その結果、利用者の「自分でできた」という実感につながることができ、一緒に喜んでいきます。全職員と協働し、「認知症があっても、自宅に帰られる方」を施設玄関から見送ることができています。

## 思いの伝え方

では、本題のリスクマネジャーの話です。私は入職後、施設内の「抑制廃止委員会」に所属しました。

1998年に行われた福岡県の10病院による「抑制廃止福岡宣言」から時間は経過していましたが、この頃の介護現場では、まだ「立ち上がり不安定な方は、転倒したら骨折してしまうので、安全のためにY字ベルトを使用する」というのが当たり前で、その雰囲気には驚いたことを覚えています。

施設長は、「本当に個人の尊厳を重視したケアになっているのか」と職員に問いかけ、「質の高いサービスを提供し、かつ抑制しない施設になろう」と呼びかけました。同時に私は、事故が起きそうなときは、抑制をしない方法で安全を確保する「意識改革」の話合いを始めました。